43

野口英世訳カールデン著『病理学的細菌学的検究術式綱要』の原書について

殿﨑正明[1]・唐沢信安[2]・岩﨑　一[3]
[1]日本医科大学図書館
[2]唐沢医院（日本医科大学）
[3]岩﨑医院（日本医科大学）

はじめに

野口英世は、明治三十二年一月にクレメンス・フォン・カールデン著の『病理学的細菌学的検究術式綱要』（以下『綱要』）を渡部鼎・野口英世纂訳として出版しているが、その原書に関しては従来全く知られていない。

野口は、明治二十九年十月に医術開業前期試験に合格した後済生学舎に通い、翌明治三十年十月に後期試験を合格し、同十一月に順天堂医院、明治三十一年四月伝染病研究所、明治三十二年六月横浜海港検疫所に勤務している。野口が短期間に医術開業試験に合格し、その後細菌学研究に入る基礎を修得したとされる『綱要』の原書について考察する。

材料と方法

平成十八年五月出版『野口英世書簡集Ⅳ』（野口英世記念会）の明治二十七年十月一日付小林栄宛手紙によると、野口に最初に医学を教えた渡部鼎は日清戦争に出征する際会陽医院の留守番を野口に頼む代わりに、彼がアメリカ留学中に修めた書籍を丸善に注文しているので、渡部鼎の留学先であるカリフォルニア大学図書館のオンライン蔵書目録で著者名を検索した。

次に野口が明治二十九年九月に上京する迄の勉強内容について、彼がテキストとして学んだ原書を、後に訳出した翻訳書と対照しながら調べた。

結果

カリフォルニア大学図書館にカールデンの本は四冊あり、そのうち英語の本は一冊で英国ロンドンのマクミラン社発行の『Methods of pathological histology / by C. von Kahlden ; tr. and ed. by H. Morely Fletcher ; with an introduction by G. Sims Morehead』（以下

『Methods』）のみで発行年は一八九四年（明治二十七年）であった。本書は、国内での所蔵図書館が確認できず、米国国立医学図書館から複写して複製本を作成した。

『綱要』は、顕微鏡の見方から始まり、細菌の病理学的組織染色・培養、検査法を説きながら細菌学的解説を述べている。「第十一章黴菌検査法」の項で扱われている細菌の種類は、ジフテリア菌、破傷風菌、チフス菌、梅毒菌、結核菌、レプラ菌、コレラ菌、等に及んでいる。

考察

『綱要』の「第十一章黴菌検査法」の項について、『Methods』と対応させて見て行くと一つの疑問に突き当たった。それは、章の見出し毎に例えば「黴菌検査法」には「Untersuchung von Bakterien」とドイツ語が併記されている点である。『Methods』の序文に、原書は『Technik der histologischen Untersuchung pathologisch-anatomischer Präparate für Studirende und Ärzte / [by] Kahlden, Clemens von, 1893』（以下『Technik』）であることが書かれていたので、WebCatPlus（国立情報学研究所）で同書が東京大学医学図書館に所蔵されている事を確認し、英語版、ドイツ語版と比較対照してみた。

その結果、Loeffler氏染色法の項で、脱色試薬を使う代わりに、野口は、「蒸水一〇・〇、強硫酸二滴、五％硝酸一滴の中にそれぞれ放置すると記述しているのに対して『Methods』では、「強硫酸二滴、五％硝酸一滴、蒸水一〇・〇、」と順番を変えているのに対して『Technik』では野口の訳出順序と一致していた。従って、野口は『綱要』を英語版『Methods』で訳し出版時にドイツ語版『Technik』をも参照しながら訳出したものと推察される。

まとめ

野口は渡部鼎に『Methods』で医学を学んでいた為に短期間で医術開業試験に合格出来、細菌学研究に入る事が出来た。その翻訳書は、出版時にドイツ語版『Technik』をも参照して書かれている事が推察された。